

オウミア No.1

琵琶湖研究所ニュース

1982年8月

編集・発行／滋賀県琵琶湖研究所
〒520-0806 大津市打出浜1-10
TEL 077-526-4800

- 琵琶湖研究スタート
- [琵琶湖研究に新時代をひらく](#)
- [琵琶湖研究所に期待する](#)
- [極地から琵琶湖へ\(1\)](#)
- [研究サロン](#)

[琵琶湖研究スタート]

滋賀県民の、そして日本人の”心のふるさと”である琵琶湖の美しい自然とその水資源の保全を目標として、**滋賀県琵琶湖研究所**が、本年4月1日正式に発足しました。所員は、所長(吉良竜夫・大阪市立大学名誉教授)、次長、研究員(数学・物理系2名、化学系2名、生物系2名、社会・人文系2名)、事務・技術7名、兼務・非常勤嘱託各1名の計19名です。今後、さらに数名の所員が増員されることになっています。



建設中の琵琶湖研究所

建物の完成は10月

研究所の建物は現在、大津市打出浜(琵琶湖文化館前)に建設中で、完成は10月の予定です。建物が完成するまでの間の仮事務所は、滋賀会館(県庁前)の3階に間借りしています。

研究所発足以来、所員は新しい建物に入れる調度備品、実験器具、図書、雑誌の選定、購入といった研究所の基盤づくりの業務に追われています。

プロジェクト研究もスタート

同時に、本来の業務である研究企画、情報管理、広報研究交流の3部門についても、活動がはじまりました。

研究企画部門では、「データベースの開発」、「琵琶湖集水域の現況と湖水への物質負荷に関する総合研究」、「湖水の運動・混合と水質変動に関する総合研究」の3プロジェクトが実施に移されています。これらのプロジェクトは、全部で16の課題群に分かれ、それぞれ大学や民間の研究者との共同研究がすすめられます。

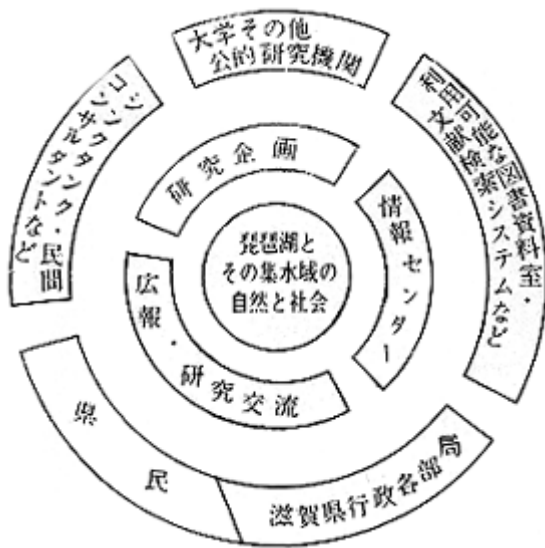
情報管理部門では、コンピュータの機種が決定し、データベース研究会の開催など情報センターづくりの作業が急ピッチですすんでいます。

広報研究交流部門では、このニュースの編集作業のほか、広報ビデオの作製準備など、さまざまな企画に多忙な毎日です。

所内研究集会

対外交流は、建物の完成まで始められませんが、さしあたりは各人の研究経歴の紹介や研究方針の討議のための研究集会や見学会などで所内の交流につとめています。

業務案内



琵琶湖研究所は、その目標を達成するため、次の3つの部門をもっています。

●研究企画部門

琵琶湖とその集水域の自然と社会に関する重要な研究課題を順次とりあげ、それに対応した研究プロジェクトの編成、研究の実施・推進をはかる。

●情報管理部門

コンピュータの導入・活用により、琵琶湖に関する情報センターとしての機能をめざす。

●広報・研究交流部門

研究成果の広報につとめ、県民・研究者・行政相互の交流の場と機会を提供する。

[琵琶湖研究に新時代をひらく]

本年4月1日、滋賀県琵琶湖研究所がスタートしました。発足にあたって、武村知事と所長に研究所の展望について伺ってみました(編集部)。

…まず最初に、知事にお伺いしたいのですが、琵琶湖研究所をつくろうと考えられた動機は何でしょうか。…

知事 琵琶湖の汚染の進行をくい止め、できればもとの碧い湖に戻すことは、滋賀県行政の長である知事の重大な責務の一つです。このため、行政部局で様々な努力をしていますが、何をやるにも科学的うらづけが必要です。それも個別対応的なものではなく、総合的体系的なものが要求されますが、従来は、この点が必ずしも十分ではなかったと考えます。たとえば、湖南中部流域下水道浄化センターのアセスメントの時、大学の先生方に研究をお願いしたのですが、まだわかっていないことが多いのを知って驚きました。この経験が研究所をつくろうと決心した動機の一つになっています。また、我々に大きなショックを与えた赤潮の発生が示す琵琶湖の汚濁の進行を何とかくい止めたいというのが、根本の動機であることはもちろんです。

前例のない研究所

…自治体のつくった純研究機関はあまり前例がないと思います。琵琶湖を相手にするのに、滋賀県だけの力量では限界があるのではないのでしょうか。…

知事 確かにその通りです。琵琶湖は滋賀県だけのものではありません。流域の1,300万の人々が上水源を琵琶湖に依存しています。また、琵琶湖は富士山とつながって日本人の心のふるさとです。琵琶湖を守っていくことは国民全体の願いです。ですから、琵琶湖の保全を目標とする研究所は、本来は国立の機関として設置すべきものではないか、と考えています。しかし、国立にすると動きはじめるのに時間がかかり、その間も琵琶湖の汚濁はどんどん進行します。とりあえず、県の力量でできる範囲からやっというこう考えたわけです。



琵琶湖研究基金(仮称)

先日新聞報道でご存じのように、琵琶湖総合開発事業の琵琶湖管理調整基金、これは下流負担金の一部を積み立てたものですが、その運用益から10億円を”琵琶湖研究基金”として積み立て、琵琶湖の研究費にあてたいと思っています。

…所長を引き受けるにあたって、知事に何かとくに注文を出されましたか。…

所長 とくに強調したのは基礎研究の重要性です。琵琶湖研究所は課題解決型の研究を目指していますが、そのためには基礎的な研究がしっかりしてはなりません。

研究所の評価はながい目で

基礎的な研究は成果をあげるまでながい時間がかかるものです。この意味で、琵琶湖研究所の成果は長期的な視野からみてほしいとお願いしました。

また研究企画についていえば、それを推進する人がしっかりした研究能力をもたないと実りあるものになりません。従って、研究員それぞれの専門分野の研究が、十分にやれるような研究環境の整備をお願いしました。

知事 いま言われたことは重要なことだと認識しています。それに研究所の運営にはたず所長の役割は非常に大きい。今後とも吉良所長の御意見を十分尊重しながら万全を期していきたいと考えています。

…琵琶湖研究の最大の課題は何ですか。…

所長 琵琶湖の研究成果はすでに非常にたくさんあります。従来は、これらの成果が各所に散在していて、相互の関連が極めてつけにくかったように思います。まずやらなければならないこと

は、これまでの成果を集大成し、琵琶湖の全体像をつくってみることではないでしょうか。それによって、どの部分の研究が遅れているか、強化しなければならない分野は何か、というみきわめをつけ、その結果にもとづいて緊急な研究課題をえらびだし、順次とりこんでいきたいと思っています。

琵琶湖データベース

琵琶湖に関する様々な情報を集積し、活用していけるようにするために、“琵琶湖データベース”を開発し完成していきたいと考え、すでに作業をはじめています。

また、琵琶湖汚濁の原因となっている陸上部の諸現象の研究が遅れていることも問題です。陸上部の自然および人間活動と琵琶湖汚濁との関係を究明し、両者を一体とした環境保全対策を立てていくことを急がねばなりません。

科学的判断材料を提供

先ほど、知事がいわれた淡水赤潮ですが今年で6年連続して発生しています。また夏季になると琵琶湖淀川から取水する水道水のカビ臭がひどくなります。このままでは琵琶湖はどうなるのだろう、ひょっとすると何年か後には飲料水源として使えなくなるのではないか、という不安感がひろまっています。

現在、滋賀県では“碧い琵琶湖をとり戻そう”と県民、事業者、行政の3者が一体となって努力をしておられます。

琵琶湖研究所では、これらに対して正確な科学的判断材料を提供し、適切な対策を立てるための基礎として役立てたいと考えています。このためには、単に研究し、結果をまとめるだけではなく、多くの人々に理解してもらわなければ研究所の成果としては十分ではありません。様々な機会を利用して、研究成果の広報に努めていきたいと考えています。

理解と支援を

最後に、琵琶湖研究所の活動は、県民、研究者、行政担当者などの幅広いご理解とご支援があってはじめて成り立つものであることを、忘れないようにしたいと思います。

[琵琶湖研究所に期待する]

森主一(京都大学名誉教授)



私は18年前(1964年)に、「自然改造計画に鍛えられる生態学」という一文を草したことがある(日生態会誌、14:170-171)。自然改造は人間生活の発展に伴って避けられないことであり、生態学者は逃げ隠れしないで、この事態に正面からぶつかることを要請されており、これによって生態学も必然的に鍛えられることになる、という趣旨であった。ところが最近、どうも生態学者の必要以上の逃げの姿勢が目立つようで、世間の信頼も、ある面において、それと共に低下しているように思う。わが琵琶湖研究所に期待するのは正にこここのところであり、吉良所長以下のご健闘を祈ってやまない次第である。

る。(元京大付属大津臨湖実験所長)

[極地から琵琶湖へ(1)]

研究員 伏見 碩二

天気の良い日には、瀬田の唐橋をわたり、湖岸治いに県庁前の研究所まで自転車で走ることになっている。この軽い運動はことのほか楽しい。なぜかと言うと、筋肉を動かした後のさわやかさもあるが、それよりも琵琶湖が安らぎを与えてくれるからだ。春霞の湖水に浮かぶ残雪の比良山系を眺めていると、自然の美しさとともに歴史への想いにかられたのである。湖国は、また山国でもある。清麗な山水は平野をうるおし、湖を養う。

湖岸には、釣人にまじって、必ずと言って良いほど、沖合を見つめている人たちがいる。あたかも湖水との静かな対話をしているかのようだ。琵琶湖の大きさは、人に畏敬の念をおこさずにはいられない。水平の広がりをもつ湖と垂直にそびえる山とは姿こそ違うが、ともに人の心に畏敬の念を与えるようだ。ヒマラヤの山々がいわゆる神々の座と言われるゆえんである。ヒマラヤの神々の姿に接すると、露が朝日とともに消えるごとく、人の罪もまた消える、とヒンズー教の人たちは語る。

北極は第一の極地、第二の極地が南極だ。ともに広大な氷原。そして第三の極地がヒマラヤだ。氷河をまとう世界の屋根。ヒマラヤの際立った垂直の高さと、南・北極のつかみようもないほどの水平の広がり。そこに共通する寒さが人をはばむ。それらの象徴が、北極点、南極点そしてチョモランマ(エベレスト)であり、人をはばむ環境ゆえに、征服すべき対象であった。これまで私は、これらの極地の氷河を中心とした自然を研究してきた。

ひるがえって、琵琶湖はどうか。なるほど、そこにはヒマラヤなどの極地のきびしい寒さはないかもしれない。しかし、人と水とのかかわりにおいて、人は琵琶湖にあたかも汚濁のうめきをあげさせ、人をはばむ環境を自ら作っているかのようだ。これは、新たな第四の極地の出現と言えるのではないか。琵琶湖の極地化が進み、やがて人の接近を許さなくなる可能性がないともかぎらぬ。

この第四の極地化現象は、いま世界中で進行している。そのなかにあつて、琵琶湖が第四の極地の象徴となることを望む人は、いったいどこにしよう。畏敬の念をいだかせる寛大な琵琶湖は、はたして何をうめいているのだろうか。かつての偉大な探検家に代って征服すべき対象は、第四の極地(琵琶湖)の自然ではなく、寒々とした極地化の波にさらされている人の心ではなかろうか。死の極地化が進んでいることを教えてくれた琵琶湖のうめき声に、まず耳を傾けようではないか。

[研究サロン]

人間とコンピュータ(1) 研究員 大西行雄

コンピュータを導入するとき、“機械的なことは機械にやらせて、我々人間はもっと高級なことをやりましょう”などと無神経に言う人がある。しかし、人間たちのこんな優越感に反して、人間の行動プログラムは機械的な繰り返しを好んでいる。同じパターンの行動を何度も繰り返すことを好み、意外なもの、予期していないものを怖れているのが人間である。新しい事態が次々に発生すれば、イライラし、胃をおかされる。ところが、そんな人間が農耕し、都市を作り、テレビ、電話、そしてコンピュータを作りあげる。こんなに多様な社会、意外性に満ちた社会を形成、維持することがなぜ可能なのだろうか。

本来異なる事柄を分類することが、その出発点になっている。いわく、近所同志は仲良くしましょう。少なくともよそものは何を考えているのかわからないから。こうやって“社会”が形成される。いわく、この木片とその木片は少し形はちがうけれども、まとめて2本と教えましょう。こうやって“数学”がうまれる。きのう会ったあなたと、きょうのあなたはけっして同じ人ではないけれど……。

一つの分類に入れてしまえば、次々に会える新しい出来事のたびに対策を考える必要がなくなる。そうして余力を生み出し、新たにもっと複雑な構造を作り出すことができる。我々は、そんな分類のための無数の約束ごとを増殖させながら、意識の下に貯え無器用にそれをあやつっている。

機械的なことといわれるコンピュータシステムはそのような人間行動の部分的模倣である。処理したい事柄を細かく分類して、これは△△系へ、これは□□系へ。行く時には印鑑と必要な書類を持って、行けば〇〇さんに渡しなさい。細かい分類の果てには、元素のレベルまで分けてしまう。コンピュータ処理の元素は、0+0、0+1、1+1の3種だけである。分類しておいて細部を忘れること、つまり機械的にやることは、人間たちが“ちゃんと”やっていくためにどうしても必要なことだ。だが、そうやって分類された無数の約束ごとの中で、真の怒り、真の喜び、感生のみずみずしさを忘れてはいまいか。コンピュータの相手をしていると、人間行動のそんな矛盾が目につく。我々は機械的なことを捨てさるのでなく、さらに“機械的でない”一つ一つの出会いも大切にしたいものである。

●編集ノート

琵琶湖研究所ニュース創刊号をお届けします。研究所発足のご挨拶を兼ねて、4月早々に創刊号を発行する予定にしておりましたが、取りまぎれて今になってしまいました。

紙面づくりとしては、第1面は研究所の活動、第2～3面は特集記事、第4面は自由な発言の場、という方針で編集していく予定です。ご意見、ご要望があればお知らせ下さい。ご投稿も歓迎します。このニュースが、研究所の顔となり、研究所の内と外を結ぶ役割りを果たすようにしていきたいと思っています。皆様のお力添えを願います。

第2号は8月末発行の予定です。(編集部)